

A s i a n J o u r n a l o f
**H U M A N
S E R V I C E S**

Printed 2011.0901 ISSN2186-3350
Published by Asian Society of Human Services

S e p t e m b e r 2011
VOL. **1**



A s i a n s o c i e t y o f H u m a n s e r v i c e s

原著論文 3

特別支援教育に携わる教師としての専門性と
バーンアウトとの関連
—教員に対するメンタルヘルスチェックの分析結果から—

**Relationship between Teacher Expertise that Involved in
Special Needs Education and Burnout Syndrome
— From the Analysis of Mental Health Check for Teachers—**

森 浩平¹⁾ (Kouhei MORI) 田中 敦士²⁾ (Atsushi TANAKA)

1) 琉球大学大学院 教育学研究科

〒903-0213 沖縄県中頭郡西原町千原1 琉球大学教育学部特別支援教育講座
ktv_m_kohei@yahoo.co.jp

2) 琉球大学 教育学部

〒903-0213 沖縄県中頭郡西原町千原1 琉球大学教育学部特別支援教育講座
atanaka@edu.u-ryukyu.ac.jp

ABSTRACT

本研究では、特別支援教育に携わる教師としての専門性とバーンアウトの関連について明らかにし、教師のストレス低減の方法を検討することを目的とする。特別支援学校教諭免許状を未取得で特別支援教育に携わる教員に対するメンタルヘルスチェックの結果から、専門性の低い群は個人的達成感の後退に陥りやすいということが明らかとなった。また、教職経験年数とバーンアウトには関連性はみられなかった。教職経験年数に関わらず、専門性を高めることが個人的達成感の後退に陥ることを防ぎ、バーンアウトの改善へと繋がること示唆された。

The purpose of this research is to disclose the expertise of special needs education relating to burnout syndrome and finding a way to reduce their stress. From the analysis result of mental health check of teachers that engaged in special needs education who doesn't have the special needs education license, it shows that the group with low expertise tends to fall into regression of personal accomplishment

Received
June 14, 2011

Accepted
August 25, 2011

Published
September 1, 2011

sense. There is no relationship between years of teaching experience and burnout. Without regarding to teaching experience, it is suggested that elevating the expertise could prevent teachers falling into regression of personal accomplishment sense and could refine burnout.

<Key-words>

バーンアウト, 専門性, 教師, 特別支援教育, メンタルヘルス

burnout, expertise, teacher, special needs education, mental health

Asian J Human Services, 2011, 1: 31-40. © 2011 Asian Society of Human Services

I. 問題と目的

1. 心理社会的ストレス研究の動向

現代社会はストレス社会と呼ばれるように、人は日常生活の中で少なからずストレスに晒され続けている。こうした逃れられないストレスによるうつ病等の精神疾患の増加、自殺者も年間 3 万人を超え、近年大きな社会問題として多くのメディアにとり扱われている。

このように社会に溢れている様々なストレス（ストレスを引き起こす刺激）とメンタルヘルスの関係について、様々な観点から分析した研究が数多く存在する。

これまでの心理社会的ストレス研究の先駆けとなったのは、「社会再適応評価尺度 (Social Readjustment Rating Scale)」を作成し、個人のストレス量を査定することを試みた Holmes&Rahe (1967) の研究である。彼らは、生活上の変化をもたらす何らかの出来事を経験した場合、社会的に再適応する際に必要とされる労力をその出来事のストレス量として数値化し、その数値の合計が高いほど、将来病気に罹患する可能性が高いことを指摘した (岡安・片柳・嶋田ら, 1993)。

こうしたストレスイベントに直面した場合、人はそこからストレスを少しでも低減するために何らかの行動を起こす。こうした行動を「コーピング (対処行動: coping behavior)」と呼ぶ。今田・上村 (2001) は、このコーピングを積極的対処行動・適応的対処行動・逃避的対処行動の 3 因子 17 項目に分類している。また、コーピングはストレスが人の心身に及ぼす影響を調整する重要な要因であり、ストレスとそれによって生じるストレス反応との間に介在する変数として捉えられる (福岡, 2001)。

日本では、坂田 (1989) がコーピングの多面的分類を行い、19 因子 58 項目のコーピング尺度を作成した。さらに尾関 (1993) は、坂田のコーピング尺度を最終的に 3 因子 (「問題焦点型」、「情動焦点型」、「回避・逃避型」) 14 項目に集約している。問題焦点型とは、情報収集や再検討などの問題解決に直接関与する行動であり、情動焦点型とはストレスにより引き起こされる情動反応に焦点をあて注意の切り替えや気持ちの調節

Received
June 14, 2011

Accepted
August 25, 2011

Published
September 1, 2011

などの行動である。また、回避・逃避型とは不快な出来事から逃避したり否定的に解釈したりするなどの行動である。実際にストレスを受けたとき、これらのコーピングは同時にあるいは継続的に行われ、相互に影響しあうことが多いと言われている。また、同じ出来事を経験しても、どのようなコーピングを行うかによって、結果として生じる心理的・身体的ストレス反応は異なってくる。コーピングは、ストレッサーが人の心身に及ぼす影響を調節する要因であり、ストレッサーとそれによって生じるストレス反応との間に介在する変数である（福岡，2001）。

近年の社会的ストレス研究では、生活ストレッサーと健康との直接的な関連性よりも、ストレス過程に影響を及ぼす要因やストレッサーのインパクトを緩衝する要因を究明することに大きな関心が向けられている（岡安・片柳・嶋田ら，1993）。

2. 教師のメンタルヘルス悪化の問題

石川・中野（2001）が小・中学校・高等学校に所属する教師を対象におこなった調査では、日常の仕事の中でストレスを「非常に感じる」あるいは「感じる」と答えた教師が半数以上を超えている。このような調査から、子どもの成長を支える教師たちが、今、自分自身の危機に曝されていると言える（田上・山本・田中，2004）。

このような深刻な状況の中にあり、多くの教師のストレス改善のための研究が増え、教師のバーンアウト（燃え尽き症候群）に目を向けようといった動きが強まっている。こうした中で提唱された「教師バーンアウト」は、特に教師に限定した概念で、「教師が、理想を抱き真面目に仕事に専心する中で、学校のさまざまなストレスに晒された結果、自分でも気づかぬうちに消耗し極度の疲弊をきたすに到った状態」と定義されている（田上・山本・田中，2004）。かつて国際労働機関（ILO）が指摘したように「教師たちは戦場並みのストレスに晒されている」と言っても過言ではない（赤岡・谷口，2009）。

Maslach&Jackson(1981)は、1,000人を超える対人専門職を対象に調査研究を行い、バーンアウト傾向を測定する“Maslach Burnout Inventory”を開発した。このMBIは、3つの尺度、①情緒的消耗感、②脱人格化、③個人的達成感から成っている。MBI尺度は、尺度研究の発展の契機となり、多くの研究者によって取り上げられた。バーンアウト尺度の研究はMBIを基幹として発展してきたといえる（落合，2003）。

教師のストレスの要因を高木・田中（2003）は職務自体・職場環境・個人的（家庭内）の3つの要因が影響しており、バーンアウトとの関連性があることを指摘している。このうち職場環境の影響によるストレッサーに関しては、役割葛藤・同僚との関係・組織風土・評価懸念の4因子25項目に分類がされている。

文部科学省の教育職員に関する統計調査（2010）によると、全国の公立小・中・高校、特別支援学校などの教員約92万人のうち、病気休職者が8627名、精神疾患による休職者は5458名で、休職者の約63%が精神疾患という事態に陥っている。精神疾患に陥る教師は年々増え続け、教師のストレス増加に歯止めがかからない状態が依然続いている。

3. 特別支援教育に携わる教師の専門性とメンタルヘルスの関連

「教員の地位に関する勧告」(UNESCO, 1966)では教師の仕事を専門職として定義し、「厳しい継続的な研究を経て獲得される専門的知識及び特別な技術を要求する公共的業務」と規定し、障害児教育教師の「専門性」は、複雑な教育的ニーズを抱えた障害児の増加を踏まえ、通常教育教師との専門性の差異は量的な差異とともに質的な差異も包含している(清水, 2003)。

教職員の勤務の実態や意識に関する分析委員会(2008)によって沖縄県の公立小・中・高校、特別支援学校に在籍する本務職員 12,760 人を対象にした調査が行われ、「日頃、悩んでいること」について、「特になし」(29.4%)が最も多く、次いで「教師としての適性」(24.4%)、「子育て」(9.8%)、「自分の病気」(6.7%)の順であった。「教師としての適性」に悩んでいる教員の割合が4分の1を占めた。他の悩みに比べて特に多い結果となっている。

特殊教育から特別支援教育へと変わり、障害種の拡大・重度・重複化に伴う一人一人のニーズに応じた適切な指導及び支援の必要性、学校と福祉・医療・保健・労働機関等との連携など特別支援教育教員に求められる専門性は非常に高まっていると言える。こうした現状の中で特別支援教育に携わる教師のストレスも高まっていくことが考えられる。

4. 目的

本研究では、特別支援教育に携わる教師のバーンアウトについて、教職経験年数、教師としての専門性、特別支援教育についての専門性等との関連性について分析し、教師のストレス低減のための対処法を検討することを目的とする。

II. 方法

1. 調査対象

特別支援学校教諭免許状未所得で、障害児の指導を担当している教員 103 名を対象に質問紙調査を実施した。

2. 手続き

2009 年 8 月 5 日の沖縄県教育職員免許法認定講習の休憩時間において、調査の趣旨説明を行いプライバシーの配慮をしたうえで調査票を 103 名へ配布、同日中に 94 名から回収した。個人結果の開示を希望した者に対しては、翌日に結果の一部を番号札と引き換えにフィードバックするものとした。

3. 調査内容

質問紙調査の内容は以下の通りである。

(1) フェイスシート

回答者の基本属性

- ・年齢
- ・性別
- ・教職経験年数

フェイスシートでは、回答者の基本属性として性別・年齢・教職経験年数についてたずねた。

(2) 教師としての専門性・特別支援教育教師としての専門性の自覚度

適当な既存尺度がなかったため、「教師としての専門性をどの程度身につけていると思いますか?」「特別支援教育についての専門性をどの程度身につけていると思いますか?」の各1項目で専門性についてたずね、「1. ほとんど身についていない」「2. あまり身についていない」「3. どちらともいえない」「4. やや身についている」「5. よく身についている」の5件法で回答を求めた。

(3) バーンアウト尺度

バーンアウト(burnout ; 燃えつき症候群)の症状を測定する尺度で、Maslach&Jackson (1981)に準拠して作成した田尾(1989)の尺度をさらに久保・田尾(1992)が改訂したものである。久保・田尾によって、信頼性・妥当性ともに確認されている。本尺度は、「情緒的消耗感」「脱人格化」「個人的達成感」の3因子から構成されていて、17項目から成り、「1. ない」「2. まれにある」「3. 時々ある」「4. しばしばある」「5. いつもある」の5件法で回答し、各因子の項目の評定値を加算後、項目数で除算した値が得点となる。

III. 結果

1. フェイスシート

(1) 回収率

本研究における調査のアンケート回収率は103名中、有効回答数は94名で、回収率は91.3%であった。内訳は、男性27名(28.7%)、女性65名(69.1%)、不明2名(2.1%)であった。

(2) 回答者の年齢

回答者の年齢については、「35歳以上40歳未満」と回答した人が一番多く、27名(28.7%)であった。次いで、「40歳以上45歳未満」が23名(24.5%)、「30歳

以上 35 歳未満」が 16 名 (17.0%)、「45 歳以上 50 歳未満」が 12 名 (12.8%)、「50 歳以上 55 歳未満」が 6 名 (6.4%)、「25 歳以上 30 歳未満」が 5 名 (5.3%)、「55 歳以上」が 2 名 (2.1%)、「25 歳未満」が 0 名 (0.0%)、不明は 3 名 (3.2%) であった。

(3) 回答者の通算教職経験年数

回答者の通算教職経験年数の平均は 14.7 年 (SD 6.6 年) であった。最大は 29 年、最小は 2 年 4 ヶ月であった。

通算教職経験年数が 1 年から 10 年未満の教員を「若手教員群」、10 年以上 20 年未満の教員を「中堅教員群」、20 年以上の教員を「ベテラン教員群」とした結果、「若手教員群」は 25 名 (27.5%)、「中堅教員群」は 38 名 (41.8%)、「ベテラン教員群」は 28 名 (30.8%) となった。

(4) 教師としての専門性の到達度

回答者の教師としての専門性の到達度については、「身についている」と回答した人が最も多く、38 名 (40.9%) であった。次いで、「どちらともいえない」が 30 名 (32.3%)、「あまり身についていない」が 22 名 (23.7%)、「よく身についている」が 2 名 (2.2%)、「ほとんど身についていない」が 1 名 (1.1%) であった。教師としての専門性が「ほとんど／あまり身についていない」と答えた教員は、全体の約 4 分の 1 であった。

回答者の教師としての専門性の到達度にばらつきがあったため、3つのカテゴリーに分類した。教師としての専門性が「ほとんど／あまり身についていない」と自覚している人を「低専門性群」、「どちらでもない」と自覚している人を「中専門性群」、「やや／よく身についている」と自覚している人を「高専門性群」とした。その結果、「低専門性群」は 23 名 (24.7%)、「中専門性群」は 30 名 (32.3%)、「高専門性群」は 40 名 (43.0%) であった。

(5) 特別支援教育教師としての専門性の到達度

回答者の特別支援教育教師としての専門性の到達度については、「あまり身についていない」と回答した人が一番多く、35 名 (37.6%) であった。次いで、「ほとんど身についていない」が 24 名 (25.8%)、「どちらともいえない」が 17 名 (18.3%)、「やや身についている」が 16 名 (17.2%)、「よく身についている」が 1 名 (1.1%) であった。特別支援教育教師としての専門性が「ほとんど／あまり身についていない」と答えた教員は、全体の約 3 分の 2 であった。

回答者の特別支援教育教師としての専門性の到達度にばらつきがあったため、3つのカテゴリーに分類した。特別支援教育教師としての専門性が「ほとんど／あまり身についていない」と自覚している人を「低専門性群」、「どちらでもない」と自

覚している人を「中専門性群」、「やや／よく身についている」と自覚している人を「高専門性群」とした。その結果、「低専門性群」は 59 名 (63.4%)、「中専門性群」は 17 名 (18.3%)、「高専門性群」は 17 名 (18.3%) であった。

2. バーンアウト（燃え尽き症候群）尺度

(1) 通算教職経験年数別の比較

通算教職経験年数の 3 グループ「若手教員群」「中堅教員群」「ベテラン教員群」を独立変数、バーンアウトの下位尺度「情緒的消耗感」「適応的対処行動」「逃避的対処行動」を従属変数とした分散分析を行った。表 1 に各下位尺度の群別得点と分散分析の結果を示す。その結果、「情緒的消耗感」「適応的対処行動」「逃避的対処行動」のいずれにおいても有意な群間差はみられなかった。

表 1 3 群のバーンアウト下位尺度平均点

	n	情緒的消耗感	脱人格化	個人達成感の後退
若手教員群	25	16.04±5.48	23.72±4.05	17.52±3.47
中堅教員群	38	14.11±4.55	22.13±5.24	19.00±4.13
ベテラン教員群	28	14.64±4.31	23.64±4.28	18.82±3.87
<i>F</i>		1.27	1.23	1.21
主効果(<i>p</i>)		n.s.	n.s.	n.s.

* $p < .05$

(2) 教師としての専門性の到達度の比較

教師としての専門性の到達度の 3 つのグループ「低専門性群」「中専門性群」「高専門性群」を独立変数、バーンアウトの下位尺度「情緒的消耗感」「脱人格化」「個人達成感の後退」を従属変数とした分散分析を行った。表 2 に各下位尺度の群別得点と分散分析の結果を示す。その結果、「個人達成感の後退」において、 $F(2, 90)=1.98$ であり 0.1%水準で有意な群間差がみられ、「低専門性群」>「中専門性群」>「高専門性群」という結果が得られた。

表 2 3 群のバーンアウト下位尺度平均点

	n	情緒的消耗感	脱人格化	個人達成感の後退
低専門性群	23	12.91±4.57	22.30±4.27	20.87±3.36
中専門性群	30	14.87±4.94	22.33±5.20	18.40±3.00
高専門性群	40	15.32±4.65	23.70±4.21	17.30±4.13
<i>F</i>		1.98	1.04	7.15
主効果(<i>p</i>)		n.s.	n.s.	*

* $p < 0.05$

Received
June 14, 2011

Accepted
August 25, 2011

Published
September 1, 2011

(3) 特別支援教育教師としての専門性の到達度の比較

教師としての専門性の到達度の3つのグループ「低専門性群」「中専門性群」「高専門性群」を独立変数、バーンアウトの下位尺度「情緒的消耗感」「脱人格化」「個人達成感の後退」を従属変数とした分散分析を行った。表3に各下位尺度の群別得点と分散分析の結果を示す。その結果、「個人達成感の後退」において、 $F(2, 90)=2.86$ であり0.1%水準で有意な群間差がみられ、「低専門性」>「中専門性群」>「高専門性」という結果が得られた。

表3 3群のバーンアウト下位尺度平均点

	n	情緒的消耗感	脱人格化	個人達成感の後退
低専門性群	59	14.07±4.71	22.71±4.71	19.07±3.73
中専門性群	17	15.24±5.11	23.47±4.27	18.65±3.66
高専門性群	17	15.71±4.71	23.06±4.56	16.59±4.05
<i>F</i>		0.97	0.19	0.06
主効果(<i>p</i>)		n.s.	n.s.	*

* $p<0.05$

IV. 考察

1. 通算教職経験年数とバーンアウトの関連

通算教員経験年数の3つのグループ「若手教員群」「中堅教員群」「ベテラン教員群」において、今回のデータからは有意な得点差は認められなかった。このことから、教員としての経験年数の差はバーンアウトを引き起こす重要な因子とはならないことが示された。教職経験年数に関わらずバーンアウトに陥るリスクがあり、経験年数に関わらず職務や人間関係等の職場環境の改善が必要と考えられる。学校という組織において教員が働きにくい環境とならないためにも、職場環境について今後検証する余地がある。

2. 教師としての専門性と特別支援教育教師としての専門性

教師としての専門性において「ほとんど身についていない」「あまり身についていない」と答えた教員は24.7%であり、同様に特別支援教育教師としての専門性において「ほとんど身についていない」「あまり身についていない」と答えた教員は63.4%であった。

今回のデータより、教師としての専門性は身についていると自覚しながらも、特別支援教育教師としての専門性については自身を持つことができていない教員が多数存在していることが示された。特殊教育から特別支援教育へと変わり、障害種の拡大・重度・重複化に伴う一人一人のニーズに応じた適切な指導及び支援の必要性、学校と福祉・医療・保健・労働機関等との連携など特別支援教育教員に求められる専門性の高まりに伴

って、教師達の関心が特別支援教育へと向けられたことが影響していると考えられる。

また、専門性とバーンアウトの関連性については、教師または特別支援教育教師としての専門性の双方において同様の傾向がみられた。教師または特別支援教育教師としての専門性が、メンタルヘルスへの影響因子であることが明らかとなった。

3. 専門性とバーンアウトの関連

「教師としての専門性」「特別支援養育教師としての専門性」の3つのグループ「低専門性群」「中専門性群」「高専門性群」とバーンアウトの関連において有意な得点差が認められ、専門性が低ければ低いほど個人達成感の後退に陥りやすいことが明らかとなった。これは専門性が低いと感じている教員ほど、仕事に達成感や有能感を感じられない（またはその逆）ということを示している。

特別支援学校においては知的障害、肢体不自由、盲、聾、病弱のすべての領域において対応できることが求められており、少なからず手探り状態のままで仕事をしている現場もあると考えられる。また特別支援教育において、発達の視点についての専門性の低さから、児童・生徒の成長に気づくことが出来ず達成感を感じることが出来ていないとも考えられる。専門性が教師のバーンアウトに関わっていることは明らかであり、さらに具体的にどういった専門性が現場の教員に求められ、メンタルヘルスと関連しているのかを今後検証する必要がある。

付 記

本研究は、科学研究費補助金基盤研究（C）「特別支援教育にかかわる教員の専門性とメンタルヘルスとの関連に関する実証的研究（研究代表者；田中敦士 課題番号21531032）」の助成を受けて行った。調査に協力くださいました学校教員の方々および情報提供を頂きました研究協力者の皆様方に感謝いたします。

文 献

- 1) 赤岡玲子 谷口明子(2009) 教師の対人ストレスに関する基礎的研究 教育実践学研究：山梨大学教育学部附属教育実践研究指導センター研究紀要，14，159-166.
- 2) 石川正典・中野明德(2001) 教師のストレスとサポート体制に関する研究 福島大学教育実践研究紀要第，40，17-24.
- 3) 今田里佳・上村恵津子(2001) 教師のメンタルヘルスを規定する要因の探索的研

究 信州大学教育学部紀要, 104, 245-208.

- 4) 岡安 孝弘 , 片柳 弘司 , 嶋田 洋徳 , 久保 義郎 , 坂野 雄二(1993) 心理社会的
ストレス研究におけるストレス反応の測定 早稲田大学人間科学研究, 6(1),
125-134.
- 5) 尾関友佳子(1993) 大学生用ストレス自己評価尺度の改定:トランスアクションナル
な分析に向けて 久留米大学大学院比較文化研究科年報, 1, 95-114.
- 6) 落合美貴子(2003) 教師バーンアウト研究の展望 教育心理学研究, 51, 351-363.
- 7) 教職員の勤務の実態や意識に関する分析委員会(2008) 教職員の勤務の実態や意
識に関する調査報告書
- 8) 久保真人・田尾雅夫(1994) 看護婦におけるバーンアウトストレスとバーンアウト
との関係ー 実験社会心理学研究, 34, 33-43.
- 9) 坂田成輝(1989) 心理的ストレスに関する研究:コーピング尺度(SCS)の作成の
試み 早稲田大学教育学部学術研究, 38, 61-72.
- 10) 清水貞夫(2003) 障害児教育教師の専門性 障害者問題研究, 31(3), 178-188.
- 11) 田尾雅夫(1989) バーンアウトーヒューマン・サービス従事者における組織ストレ
スー 社会心理学研究, 4(2), 91-97.
- 12) 高木亮・田中宏二(2003) 教師の職業ストレスーに関する研究ー教師の職業スト
レスーとバーンアウトの関係を中心にー 学術研究教育心理学編, 47, 57-72
- 13) 田上不二夫・山本淳子・田中輝美(2004) 教師のメンタルヘルスに関する研究とそ
の課題 教育心理学方, 43, 135-144.
- 14) 福岡欣治(2001) 松井豊・編 心理測定尺度集Ⅲ サイエンス社
- 15) Holmes&Rahe(1967) The Social Readjustment Rating Scale, Journal of
Psychosomatic Research, 11, 213-218.
- 16) Maslach C, Jackson S(1981) The measurement of experienced burnout,
Journal of Occupational Behavior, 2, 99-113.
- 17) 文部科学省(2010) 平成 21 度教育職員に係る懲戒処分等の状況について
- 18) UNESCO(1966) Recommendation Concerning the Status of Teachers
ILO/UNESCO

Received
June 14,2011

Accepted
August 25,2011

Published
September 1,2011

Asian Journal of Human Services
VOL.1 September 2011

CONTENTS

ORIGINAL ARTICLES

- Employment Policies for Older Individuals in Advanced Countries: Implications
for Employment Policies for Older Individuals in South Korea..... **In-Jae LEE • 1**
- Evidence-Based Practices for Rehabilitation Services in Asian
countries : Applications and Recommendations **Hyun-Uk SHIN • 20**
- Relationship between Teacher Expertise that Involved in Special
Needs Education and Burnout Syndrome— From the Analysis
of Mental Health Check for Teachers— **Kouhei MORI • 31**
- Study on the Institution, Law and Finance of Special
Education in South Korea..... **Chang-Wan HAN • 41**
- The Effect and Policy Tasks of Care Services for the Elderly Living
Alone in South Korea **Jung-Don KWON • 59**
- The Current Situation and Tasks of Hospital Schools for Students
with Health Impairment in South Korea **Chang-Wan HAN • 77**
- Causes of Transition from Institution to Group Home for the
Persons with Intellectual Disability, Analyzed with the ICF **Atsushi TANAKA • 100**
- The Present Condition of Mental Health in Teachers that engaged in
Special Needs Education
— From the Analysis of GHQ28 for Teachers— **Kouhei MORI • 112**
- Research of Support Function of General Support
Center at the Time of Disaster **Keiko KITAGAWA • 120**

SHORT PAPER

- Behavioral and cognitive change of elderly with mild dementia
that participated in the "cooking" program **Hiroki INAGAKI • 131**

ACTIVITY REPORT

- The report of the certification of IPR (Instructor of Power Rehabilitation)
for South Korea..... **Yoshiki KATAOKA • 142**